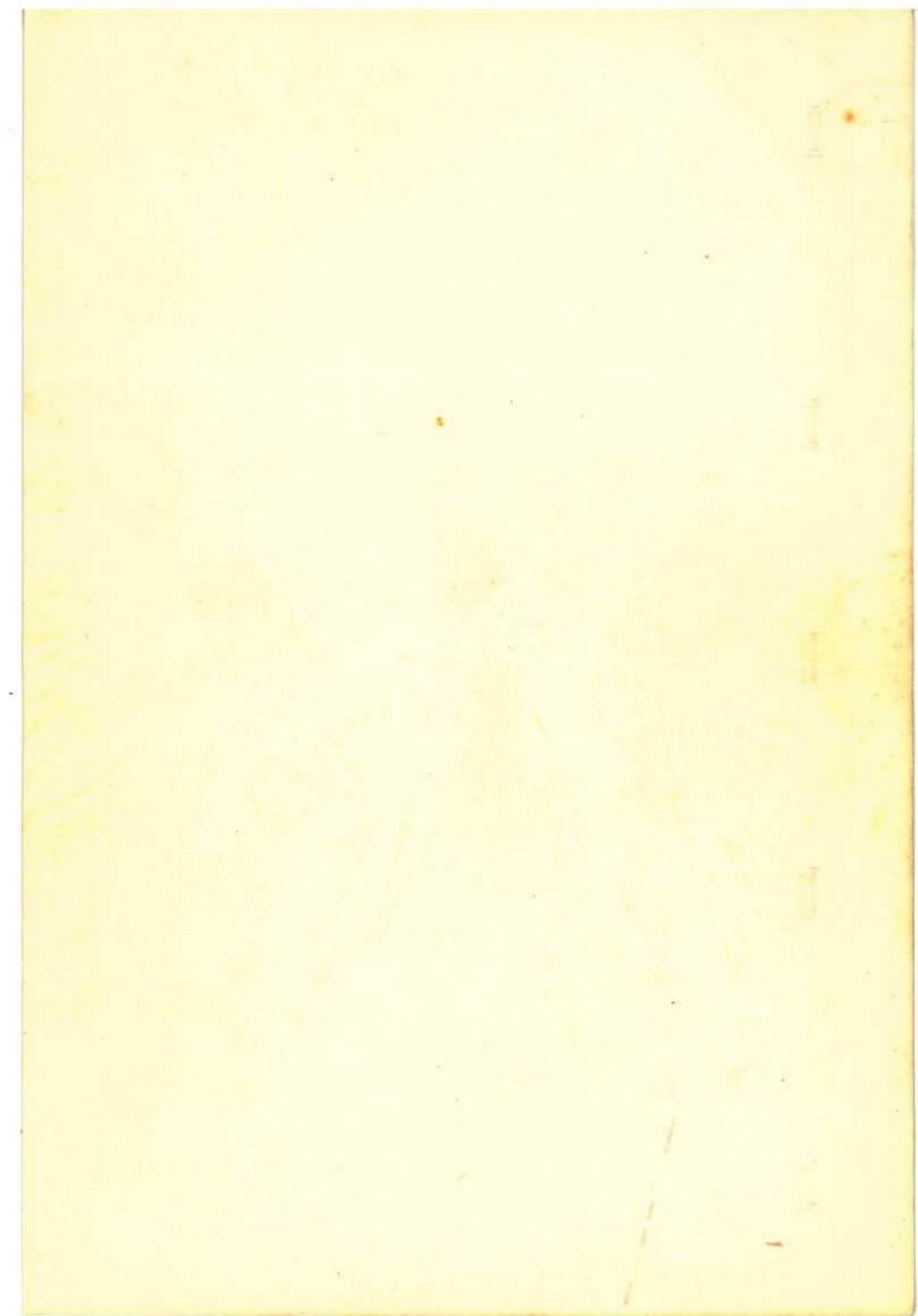


静岡県指定  
有形文化財  
龍華院大猷院靈屋修理工事報告書

文化財保







昭和五十五年九月

静岡県指定  
有形文化財

龍華院大猷院靈屋修理工事報告書

掛川市



## 序

龍華院大猷院靈屋は三間四方、方形造向拝付漆塗、極彩色が施された小規模ではあるが豪華絢爛たる建物である。これは明暦二年北条出羽守氏家が三代將軍家光公の靈廟として建立した当初の建物が、文化十五年三月一日焼失し文政五年再建になった建物で、この建物の優れた手法と時代の特性を示す価値が認められて昭和二十九年一月静岡県有形文化財（建造物）に指定された。

この靈屋は再建後、屋根改変、葺替以外は大修理がなされておらず、よく当時の状態を護持されてきたが近年に至り雨漏等による腐朽、漆、彩色の剥落によつて絵様が消滅寸前の状態にあつたのでこれが保存修理を計り、静岡県の指導援助により今回修理を行なつたものである。

修理事業は総経費四千八百万円、県から二千四百万円の補助を受け、残額は市負担を以て、昭和五十四年十月一日より同五十五年九月三十日にかけ半解体修理工事を実施し、工期十二ヶ月を以て滞りなくここに完了した。

これにより、掛川における江戸時代の美しい文化遺産が復元され、あわせて旧掛川城趾一帯の保存整備が大いに進められたわけで、生涯学習運動の一成果一教材として、末永く大切にされることを祈願するものである。

この報告書は工事の記録と、工事中の調査に基づく各種資料をまとめたもので、この文化財をひろく世に紹介すると共に後世に伝える資料として各界に利すること多きを期待している。

終りに終始専門的立場から指導を賜つた静岡県教育委員会と工事設計監理およびこの報告書の編集に当られた財団法人文化財建造物保存技術協会ならびに龍華院住持海野榮久氏、その他関係各位に対して心から謝意を表する。

昭和五十五年九月

修理委員長（掛川市長）

榛 村 純 一

## 例

## 言

一、この報告書は、將軍家光公靈牌を奉る靈廟建築として建立された龍華院所  
有になつてゐる靈廟建築の修理に関する補助事業の一部として刊行された  
ものである。

二、編集に当つては今回の工事の概要のほか、工事中の調べによる彩色の復原  
事項、およびこの建造物に関する各種参考資料などをまとめた。

三、図面および写真については工事中作製または撮影した多數の内から、図面  
については記録保存団（原図は寺院保管）とその他の説明図を、写真につ  
いては修理前後並びに工事中の記録と各種資料写真の主要なものを掲載  
することとした。

四、本文、図面共表示寸法はメートルによつたが必要に応じて尺を併記した。

### 五、編集担当 財團法人文化財建築物保存技術協会

理事長

有光次郎

工事監督

廣瀬 沸

総括編集責任  
本文 右 全

図面 協会技術職員  
写真（修理前及び現場写真）  
廣瀬 沸

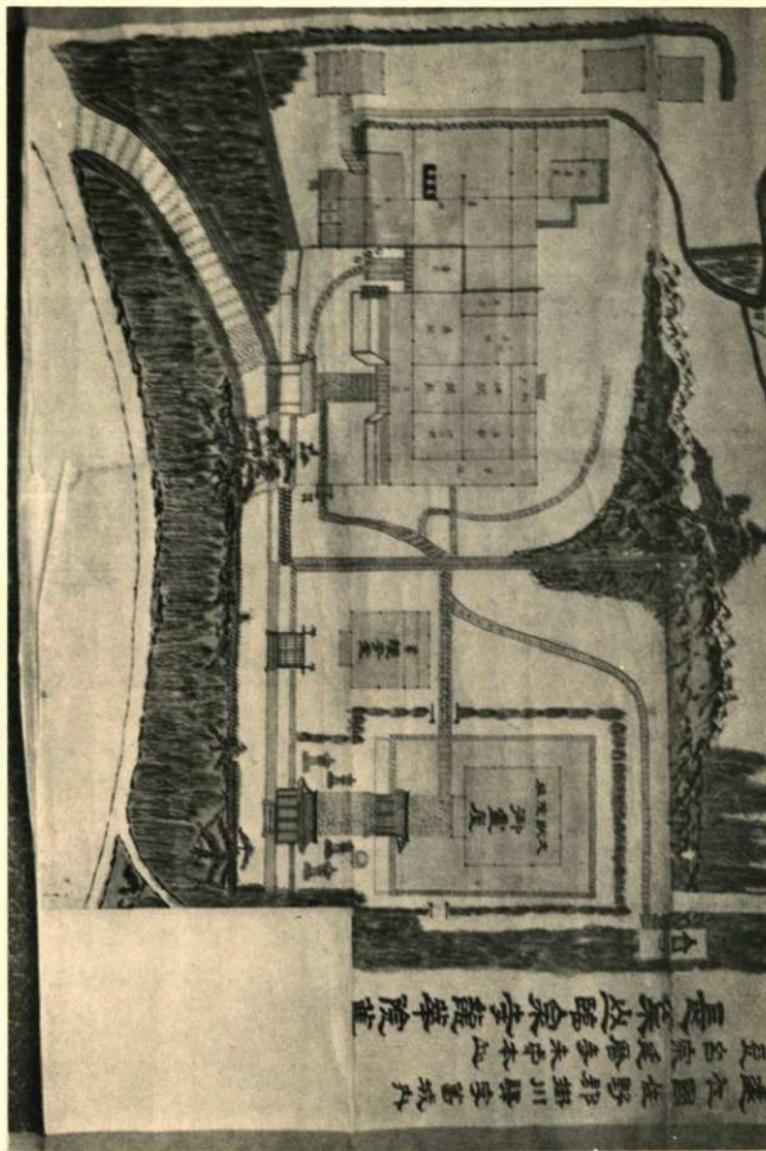
（竣工）

真陽社



龍華院大歎院靈廟の位置を示す掛川市の地図

現在龍華院保管明治初期と推定の整理を中心に作製された境内配圖図





静岡県指定  
有形文化財

# 龍華院大猷院靈屋修理工事報告書

## 目 次

卷頭  
龍華院大猷院靈屋の位置を示す掛川市の地図  
現在龍華院保管、明治初期と推定の靈屋を中心には作製された境内配置図

### 第一章 建造物の概要

1

#### 第一節 指定公示

1

#### 第二節 規 模

1

#### 第三節 構造形式

1

#### 第四節 建物の建立及び沿革

1

### 第二章 修理工事の概要

1

#### 第一節 工事経過及び組織

2

#### 第二節 工事実施工程

2

#### 第三節 工事費

4

第四節 工事実施仕様 ..... 5

第二章 調査事項 ..... 12

第一節 修理前の破損状況 ..... 12

第二節 後世の修理 ..... 14

第三節 旧規に関する調査と復旧 ..... 14

第四節 棟札、発見古文書 ..... 15

# 写真目次

- 第一図 塗工 全影（南西面）  
第二図 塗工 向拝詳細  
第三図 塗工 宝殿軒見上詳細  
第四図 塗工 正面（南側）  
第五図 修理前 正面（南側）  
第六図 塗工 侧面（西側）  
第七図 修理前 侧面（西側）  
第八図 塗工 背面（北側）  
第九図 修理前 背面（北側）  
第一〇図 塗工 南西面軒見上げ  
第一図 修理前 南西面軒見上げ  
第二図 塗工 向拝柱上部、虹梁、斗拱、丸桁の彩色  
第一三図 修理前 向拝柱上部斗拱、丸桁の彩色破損状態（外部より見る）  
第一四図 塗工 正面側柱下部と縁廻り詳細  
第一五図 修理前 正側面柱下部剥離落と縁廻り破損状態  
第一六図 塗工 背面外部の破損状態  
第一七図 修理前 背面外部の破損状態  
第一八図 塗工 縁廻り、高欄詳細  
第一九図 修理前 縁廻り、高欄の破損状態  
第二〇図 塗工 外部側面舞良戸、長押取付状態  
第二一図 修理前 外部舞良戸、長押破損状態  
第四三図 塗工 屋根宝珠詳細  
第四四図 塗工 唐戸詳細  
第四五図 塗工 舞良戸詳細  
第四六図 資料 房子金具詳細  
第四七図 資料 唐戸金具詳細  
第一三図 塗工 宝殿軒隅見上詳細  
第一四図 塗工 外部軒見上詳細  
第一五図 塗工 内部正面（北面）  
第一六図 塗工 内部正面（北面）  
第一七図 塗工 内部側面（東面）  
第一八図 塗工 内部見返し（南面）  
第一九図 塗工 内部合天井  
第二〇図 塗工 天井絵東北隅見上げ  
第二一図 塗工 天井絵東南隅見上げ  
第二二図 塗工 天井絵西北隅見上げ  
第二三図 塗工 天井絵南西隅見上げ  
第二四図 塗工 宝殿平斗拱部詳細  
第二五図 塗工 宝殿斗拱、木鼻、軒の詳細  
第二六図 塗工 向拝タバサミ  
第二七図 塗工 向拝柱上部、虹梁、斗拱、丸桁の彩色  
第二八図 塗工 内部柱、斗拱、長押の彩色  
第二九図 塗工 向拝柱と虹梁形頭貫の彩色  
第四〇図 塗工 房子  
第四一図 塗工 須彌壇向拝見返し  
第四二図 塗工 正面中央間のハスの画（房子の裏）

## 図面目次

- |             |                      |                        |
|-------------|----------------------|------------------------|
| 第一回 塚工平面図   | 第五八回 破損平葺            | 第四八回 資料 宝殿の高欄と斗拱       |
| 第二回 塚工正面図   | 第五九回 破損 小屋組、野隅木      | 第四九回 資料 須彌壇斗東と親柱宝殿高欄規柱 |
| 第三回 塚工側面図   | 第六〇回 破損 小屋組と野地       | 第五〇回 資料 降棟鬼、唐草瓦        |
| 第四回 塚工梁行断面図 | 第六一回 破損 壕屋根と工作場の仮設状態 | 第五二回 資料 須彌壇の高欄と斗拱      |
| 第五回 塚工桁行断面図 | 第五三回 資料 内部腰長押彩色      | 第五四回 組立 小屋組、野地の状態      |
| 第六回 塚工見上図   | 第五五回 組立 屋根平瓦葺の状態     | 第五六回 破損 内部天井繪          |
| 第七回 塚工詳細図   | 第五七回 破損 天井繪詳細        | 第五八回 資料 斧丸瓦            |

# 静岡県指定有形文化財 龍華院大猷院靈屋修理工事報告書

## 第一章 建造物の概要

### 第一節 指定公示

昭和二十九年一月二十日

静岡県指定年月日

公示番号	名 称	員数	構造及び形式	所有者	所在の場所
静岡県教育委員会 第二三号	龍華院大猷院 燕屋	一棟	桁行三間、梁間三間	静岡県掛川市掛川	宝殿 磯石上端より茅負外下角まで
		三間、	向拝一間、	静岡県掛川市掛川	軒高 宝殿 磯石上端より茅負外下角まで
			棟瓦葺宝形造附	龍華院	軒面積 平面積
			春日房子一基	龍華院境内	屋根面積 平面積

### 第二節 規 模

宝殿

桁行

梁間

軒の出

軒高

棟高

向拝

柱間真々

兩端柱間真々

両端柱間真々

側柱真より茅負外下角まで

側柱真より茅負外下角まで

側柱真より茅負外下角まで

側柱真より茅負外下角まで

側柱真より茅負外下角まで

一、三五〇m

内部縫入り格子天井。後方中央間壁縫張り前に須彌壇置、春日房子。内外漆

### 第二節 構造形式

桁行三間、梁間三間床下部八角造丸柱上部標付。柱真より外側化粧土台人、磯石上建。地皮、内法貫、木鼻出しの頭貫、唐様台輪。向拝一間几帳面取角柱、双盤柱上建。桁行虹梁端パクー付、中央に蓄股。周囲四方小口縁、切目長押、外部と内部に内法長押。腰長押は正面、両側中央出入と内部須彌壇側以外に取り付く。擬寶珠高欄、正面木階五級。

唐様三斗組、二軒繁檼、布裏甲上に切真甲、屋根宝形造棟瓦葺。

正面中央一枚折棟唐戸、両脇間連子窓内側に引違板戸と障子一本。両側面中央引違舞良戸障子一本。前端連子窓内側に引違板戸と障子一本。他板壁。床下各間連子建込。

塗及び彩色塗。床中央部漆塗四周疊敷。

#### 第四節 建物の建立及び沿革

##### 一、建立

龍華院は静岡県掛川市の東海道線掛川駅より東北約一、五軒の小山にあり、

明暦元年（一六五五）に掛川城主北条出羽守氏重が三代将軍家光公（大猷院殿）

の靈牌を幕府に申下し、本丸山の東北五〇〇メートルに永禄十二年掛川城攻の戦いの時徳川家康の本陣を置いた前玉三城の中心龍胸山（長松山）にその靈廟を建築し城の守衛と幕府に対する政治的配慮により建立したことに始まる（伝えられている）。建物完成により東坂山より守備を招いて龍華院と稱し檀家を持つことを禁じられ城主より二〇〇石与えられ廟の守護に当たった。

##### 二、沿革

文化十五年（一八一八）三月一日掛川城下よりの出火により龍華院の靈廟は

春日厨子と靈牌を残し焼失した。現在の建物はその後文政五年（一八二二）に城主太田攝津守源朝臣始により再建完成したものである。掛川市稿「文政五年の頃に『同年十一月十九日龍華院御靈舎焼失後再建就遷座祭を行ふ』とあり、同建物小屋内に次の棟札を残している。

一、「文政三年庚辰夏四月」の記のあるもの。

二、「文政五年壬午三月十六日……」の記のあるもの。

三、「御普請掛……」（裏面追記明治四十年四月三十日）の記のあるもの。

以上により文政五年に現靈廟が再建を明らかにし明治四十年屋根模様替の大修理とその他小修理を得て残存されたもので昭和二十九年一月静岡県有形文化財に指定。昭和五十四年十月一日より昭和五十五年九月三十日まで十二ヶ月の歳月を掛け半解体、塗替工事を実施した。また工事中第三章第四節に記載の文政一年再建に着手の仕様張が発見され文政五年再建になつたことが確証された。

### 第一章 修理工事の概要

#### 第一節 工事経過及び組織

##### 一、工事の経過

年度、昭和五十五年において仕事別請負工事として施工をした。

靈廟は前述のように檀家なき龍華院所有の建造物で漆塗等の耐久年度が過ぎても補修の配慮に至らず近年腐朽、破損が甚だしく、掛川市で保存修理計画を行つた。県費、市費の金額補助を持つて昭和五十四年十月一日より工期十二ヶ月、予算額、金四千八百萬円で工事に着手する運びとなつた。

工事は市教育委員会が寺より委託を受け工事期間中主体となり、昭和五十四

年、工事の経過は半解体修理で軸部は在来のままとし、高欄、縁廻りを解体修理組立、屋根は瓦を一たん卸し軒先の不陸是正、野地補修の上葺替した。塗装は外部を新規に塗直し内部は補修、天井は表具やり替、欠失部補筆を行つた。建具補修、須彌壇の塗補修、脛の取替も行つた。基礎は周囲に雨落葛石を設け排水設備を行つた上、基境の二ヶ所に柵扉を設ける等の施工をして昭和五十五年九月三十日工事の終てを完了した。



## 第二節 工事実施工程

工事着手 昭和五十四年十月一日  
起工式 実施せず  
上棟式 実施せず  
工事完成 昭和五十五年九月三十日

工事施工工程表

工事種目	着手年月日			終了年月日		
	工事着手準備	解体工事	仮設工事	工事着手準備	解体工事	仮設工事
基礎工事	昭和五十四年十一月一日	昭和五十四年十月十五日	昭和五十四年十月十五日	昭和五十四年十月十五日	昭和五十四年十一月三十一日	昭和五十四年十一月三十一日
木工事	昭和五十四年十二月一日	昭和五十四年十一月二十一日	昭和五十四年十二月二十七日	昭和五十四年十二月二十一日	昭和五十五年一月十日	昭和五十五年一月十日
屋根工事	昭和五十四年十二月二十日	昭和五十五年一月二十日	昭和五十五年一月二十日	昭和五十四年十二月二十五日	昭和五十五年二月二十五日	昭和五十五年二月二十五日
塗装工事	昭和五十五年三月一日	昭和五十五年二月三十一日	昭和五十五年三月一日	昭和五十五年三月一日	昭和五十五年八月三十一日	昭和五十五年八月三十一日
彩色工事	昭和五十五年三月一日	昭和五十五年三月二十八日	昭和五十五年三月二十八日	昭和五十五年三月二十八日	昭和五十五年八月三十一日	昭和五十五年八月三十一日
金具工事	昭和五十五年二月十五日	昭和五十五年二月十五日	昭和五十五年二月十五日	昭和五十五年二月十五日	昭和五十五年九月十日	昭和五十五年九月十日
表具工事	昭和五十五年二月一日	昭和五十五年二月三十日	昭和五十五年二月三十日	昭和五十五年二月三十日	昭和五十五年九月十日	昭和五十五年九月十日
雜工事	昭和五十五年四月一日	昭和五十五年四月一日	昭和五十五年四月一日	昭和五十五年四月一日	昭和五十五年九月三十日	昭和五十五年九月三十日
務務整理	昭和五十五年九月五日	昭和五十五年九月三十日	昭和五十五年九月三十日	昭和五十五年九月三十日	昭和五十五年九月三十日	昭和五十五年九月三十日

## 第三節 工事費

総収入額  
内

四八、〇〇〇、〇〇〇円  
一一四、〇〇〇、〇〇〇円  
一一四、〇〇〇、〇〇〇円

静岡県補助額  
掛川市補助額  
所有者負担額

### 事務費

内

需用費 八三六、〇〇〇円  
消耗品費 三六、〇〇〇円  
印刷製本費 五四〇、〇〇〇円  
諸経費 五六〇四、三七〇円  
雜務費 八六〇、〇〇〇円  
内 一二六〇、〇〇〇円

總支出額	四八、〇〇〇、〇〇〇円	内	四三、〇四〇、〇〇〇円	四六〇、〇〇〇円	四、一〇〇、〇〇〇円	工 事 務 費
修理工事経費	四八、〇〇〇、〇〇〇円	内	四三、〇四〇、〇〇〇円	四三、〇四〇、〇〇〇円	四三、〇四〇、〇〇〇円	委 託 費
工事費(請負費)	二、一七七、〇〇〇円	内	五六〇、二五〇円	四、三九三、〇〇〇円	一、五二三、一五〇円	
仮設工事費	二六、一〇三、六五〇円	内	一、六〇九、〇〇〇円	一、〇六九、五八〇円	一、〇六九、五八〇円	
解体工事費	一、六〇九、〇〇〇円	内	一、六〇九、〇〇〇円	一、六〇九、〇〇〇円	一、六〇九、〇〇〇円	
木工事費	一、六〇九、〇〇〇円	内	一、六〇九、〇〇〇円	一、六〇九、〇〇〇円	一、六〇九、〇〇〇円	
屋根工事費	一、五二三、一五〇円	内	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	
塗装工事費	一、五二三、一五〇円	内	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	
金具工事費	一、五二三、一五〇円	内	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	
雜工事費	一、五二三、一五〇円	内	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	一、五二三、一五〇円	

役務費

通信運搬費

委託料

委託料

設計監理費

一四、〇〇〇円

一四、〇〇〇円

四、一〇〇、〇〇〇円

五八八、〇〇〇円

三、五一二、〇〇〇円

## 第四節 工事実施仕様

### 一、仮設工事

イ、素屋根

(登棧橋付) 柄行一二m梁間一四m、建坪一六八m<sup>2</sup>、柱獨立、

屋根切妻造、一棟。

建地は柱間二四m内外に根入三〇cm以上軒先より一、二m外に建て、布は飛付  
一、五mそれより上は一、二m割、棚は軒先より九〇cm下に設け、根太割六〇  
cm内外、足場板九〇cm巾に敷並べ要所は根太に釘止めとした。要所控柱、筋造、  
方材を取設け、各組手鉄線端み、鍛、ボルト、ステーク等を用いて繋結し

た。小屋は登合掌組とし振止め筋造等を取付け、屋根は亜鉛引鉄板(波形)葺  
とした。登棧橋は勾配%以内にり止め、手摺を設けた。

ロ、工作小屋 柄行四m、梁間五m、建坪二〇m<sup>2</sup>、柱獨立、屋根切妻造、一連  
式一棟。

出入口扉付、周囲及び屋根明り取り設け鐵板張りの外前記に準じて工作し  
た。

ハ、塗装資材天井補修工作小屋 柄行六m、梁間五m、建坪三〇m<sup>2</sup>、柱獨立、

床板張、屋根切妻、一棟。

工作小屋と接触させ三面壁とし工作小屋と同様の施工をした。

二、休憩所兼詰所 平家組立ハウス、柄行五、四m、梁間三、六m、建坪一  
九、四四m<sup>2</sup>、一棟、カタログ提出により許可の上設置した。

ホ、境界構 高さ一、八m、延べ長六〇m、杉丸太末口七cmを一m間に配し堤建  
て、二間置に控柱を設け上、中、下三段に貫を通しラス張りとした。出入口

一ヶ所、木枠組外開き戸一枚大帳番にて吊込み有刺鉄線張り戸締金具を付し  
た。

ヘ、危害防止、消化設備 各所に危害防止注意札、禁煙札、立入禁止札を立て  
防火水槽、消火器、バケツ等備えつけた。

### 二、解体工事(部分)

本建物解体については主として縦彌りの解体と屋根野地腐朽部の一部解体に  
とどめ、屋根葺替、塗装工事、天井絵の表具遺替等を施した。

解体に当つては完全な水盛造方を設け、解体に先立ち内外部要所の写真撮影  
をし、各部の実測および破損調査の後、建物解体番付図等を作製し、番付木札  
を打付け解体後の整理にあたった。取解に当つては残が損傷しないよう充分注意  
を払い、主要部は養生するなど取扱に慎重を期した。道具、天井板等は特に布、  
合織綿で養生した。

### 三、基礎工事(当工事では雑工事内に予算を組む)

イ、地盤の状態 現状は小山頂上平地に加工切石積、周間に葛石、玉垣を巡ら  
せた大きな基壇で非常に強固に作られていてこの内部に建つている建物で裏側  
中央部一本の柱礎石が二四m下った以外他の柱礎石、縁東石にはほとんど狂いは  
なかったので礎石は現状のままで正面向拝以外の宝殿四面に雨落し葛石を覆  
し軒内間は玉石厚6cm敷込みとした。

ロ、補足石材 雨落葛石……巾一五cm、成一五cm、長手六〇~九〇cm硬質伊  
豆石の切石を使用した。

ハ、地盤 葛石下布コンクリート打、



野地板	当	杉	突付	コマ返し	チヨナ
					ソマ 野樺に釘打

全上

## (二) 鉄材工法

区分	在米の工法			実施の工法
	当	初	時代別捕要	
緑板掛	当	和	釘	洋釘頭つぶし打付け
切目長押	当	和	釘	洋釘頭つぶし打付け
野性種	当	和	釘	洋釘再用打付け
化粧種	当	和	釘	洋釘打付け
野地板	当	和	釘	洋釘打付け

のない長七五cm葦足とし要所を押縫で押え土居葺した。  
葺上後キシラモン散布一回を行なった。

二、葺土、平葺土は使用三ヶ月前に薦訪と在来の葺土を十分混練し、ねかしたもの、軒先瓦下及び製斗横には砂、石灰、芋訪を混練した砂漆喰を使用した。  
ホ、瓦割り、唐草口巾を基準に、反り出し等格好よく割付け、瓦座をなじみよく合せた。

ヘ、平葺、葺土は筋置きとし、唐草瓦は一八#銅線にて瓦棟に吊り止め、平瓦は登り五枚毎に一八#銅線にて吊り止めた。以下各面より平瓦の重ね面をなじみよく合せ順次葺上げた。

ト、棟樑、鬼取付、隅棟の形式及び積高は工法を研究の上整理して積上げた。  
のし積は各段目連に砂漆喰を用いて積上げ、各段毎又は一段置きに銅線で緊結した。

鬼瓦は各隅共稚兒鬼が大きく、二の鬼が小さく逆取付になっていたので位置を人替え一六#銅線六条燃りのもので小屋内構造機に緊結した。

- イ、再用瓦、在来の瓦は全部同一形式手法の瓦で破損度、耐久性等により再用、非再用に選別し再用合格瓦を使用した。鬼は稚兒鬼と二の鬼を入れ替えて全部を再用した。  
再用瓦はすべて水洗いして、十分乾燥を図った。
- ロ、補足瓦、屋根全面に一種類の瓦が使用の為この形式に倣い焼度の関係上奈良の小林麻造氏に作製を依る焼成度一二〇〇度以上、吸水率一二%以下のものを作製した。

チ、露盤取付、露盤下の瓦積は隅棟形式整理の上から積上りを一段減じ從来の形式で積み、露盤を漆喰して旧位置に取付けた。

ハ、土居葺、杉皮葺とし材料及工法は在来のものに倣い杉皮は筋六、腐れなど

## 六、塗装工事

作り、塗装区分により、施工範囲を定め工事を実施した。

## イ、漆塗

(一) 調査、着手に先立ち在来の手法、材料の剥落状態など十分調査して各部の修理方針を決定した。

### (二) 材料、生漆 精製漆(日本産又はそれに準じたもの)

金箔 金含有量九〇%以上、A三号色、一〇、九cm角

朱、弁柄 風呂は何れも見本品提出により決定

布 本麻

丹 鉛丹

(三) 工法、本直し、外部漆塗部が全面老化、断紋を生じ、且つ木部の損傷が現れ、表面からの押え修理が不可能であった部分を下地まで叩き落し

又は搔落し等の手法で素地まで露出させ、總体に鉛塗下地付、左記仕様工程に基き施工し各細部の決定施工は工事監督の現場指示によつた。

①向拝柱(面)は黒漆布着仕上。木階、柵橋共見付は丹塗三回施工とした。

②身寄柱外面(切口長押より下部を除く)柱間内、板壁は塗肌の老化著しく、疵木割れ等があり黒漆布着仕上げとした。

③外側切目、腰、内法の各長押半長押。敷居鶴居見付けは塗肌の老化著しく、疵、木割れ等があり黒漆本直とした。

④外部頭貫、木鼻、台輪は塗肌の老化著しく黒漆本直とした。

⑤向拝虹梁中央下端と内部腰長押は朱漆本直しの上漆押とした。

⑥通肘木、天井迴縁、天井格縫は黒漆上塗直しとした。

⑦隅木、地檻、飛簷檻、木負、茅負、裏甲は弁柄、漆草搭合せとした。

⑧向拝部軒廻、組破風を含め屋根廻りと同様弁柄漆草搭合せとした。

⑨内部床、樅共黒漆草搭合せとした。

- ⑩正面方立、小島板、内法窓堅持は黒漆本直し一部朱面とした。  
⑪縁廻りと軒廻床下、高欄の縁べては丹塗三回施工仕上げとした。  
⑫棟唐戸、舞良戸、明障子、窓板戸は黒塗本直しとした。  
⑬扇子、須彌壇は部分繪い漆拭とした。

## A、本直し基準工程

### 新材塗の部

回数	名稱	資材と工具	摘要
1	防腐處理	フォルマリン原液等	虫害その他防止のため 二回以上
2	脱脂處理	焼錢火力	筋部その他の樹脂凝結部 の処理
3	刻字彫り	丸のみ、小刀、切出し	筋部乾割れ部分巾3mm 深3mm位
4	生木地(固め)	生漆、蓖、刷毛	
5	飼い込み刻字	麻布、麦粉、生漆、竹蓖	直接生漆浸透補強工作
6	刻 芽	糊、麦粉、刻字穂、木粉、生漆	刻字部の麻布張込み
7	引込地付け	地の粉、水、生漆、紙の粉、蓖	右仝 更に旅役を防ぐ 充填する
8	切 粉 付	細目地の粉、水、生漆	
9	布 善 せ	麻布、麦粉、糊、生漆	主要部分分布を張る
10	布目擴え	小刀、切粉 布節を載り にて均す	塗表面全部の肌の均齊

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
生漆固め 錆地研ぎ		右 同	鏽 付け し	荒 し	切粉固め	切粉研ぎ	切粉付	紙 荒 し	紙 着 せ	下地研ぎ	右 全	右 全	下地付 (目止め)	布 荒 し	大村紙其の他
油煙炭、生漆 水、白色		右 同		砂 の粉、水、生漆	サンドペーパー	サンドペーパー	細目地の粉、水、生漆	大村紙、水	吉野紙止壁	金剛紙、大村紙、水	右 全	右 全	地の粉、水、生漆	布のケバを立て下地の重 音を図る	布のケバを立て下地の重 音を図る
錆肌補強、黒色附与。 地肌の仕上平滑を期す。		右 同			次回錆の薬膏を図る。 切粉肌の目を薬膏にする。				地肌の平滑	下地の中間層			此回より肉付を保らて木 瘤せ、布 瘤せを防ぎ木部を平坦と し且つ重 厚感を図る。三回にて布 共厚約一、五 mm	第一回は布目充填	第一回は布目充填

5	4	3	2	1	回数	名稱	資材と工具	摘要	要
古材塗の部									
木地固め	剣等彫り	防塵処理	業地整備	古漆層剥落し	33	上塗	上塗漆、黒、赤	上塗下の補強。	水、耐水ペーバー、朴炭等
生漆(又は生漆麦粉縫)	丸のみ、小刀、切出し	フォルマリン原液等	サンドペーパー、金剛紙	漆師手斧、平のみ等	32	衣中塗研ぎ	朴炭、水	平滑蜜着	鏡面の欠陥を補し、均一 となす。
全面		等	漆表層の全部	漆表層の全部	31	衣中塗	中塗漆	右全	上塗の部

以下1～33回に至るまで新材料の本直し工程に同じ

## B、上塗直し基準工程

部分的な破損箇所は、銷付け（本直し）二十三回工程より補修し、基準工程は同工程の28～33工程によつた。

無地……本地に直接塗る場合。素地を十分清掃の後、傷は埋木刻等鋼

い後、表面を平滑に均した。

### C、塗合塗基準工程

下地調整の後、銷付を行い24～33の上塗直しに準じて施工した。

### D、漆箔押基準工程

素地は、1～32工程を済ませ箔下塗を塗り金箔押を行つた。  
補修部分は剥落程度に応じて金箔押の補修を行つた。

### 口、彩色塗

(一) 調査、着手前、文様、配色その他正確な見取図を作製し、工事監督の指示に従つて修理方針を決定した。

### ⑤補筆及び剥落止

色彩及び置上部分の剥落箇所は清掃した後、從来と同配色により補筆を行つた。又完了後剥落止を施した。

### ③平彩色

漆箔押の上に平彩色を前記に倣い施工した。

### ②置上彩色

下地固めの後形置して置上部を丹具を用いて3～5回の工程で置上げ、下塗胡粉を塗り箔押箇所はこれを行い、下塗後、各顔料を調和よく塗り上げその上に線書、又は毛書きを行つた。

### (二) 材料、生漆

#### 顔料

日本産良質品又はそれと同等と認められたもの。

### 八、丹塗、綠青、胡粉塗

(一) 計画、在來の各塗装を一旦全部落した上、在來仕様による丹塗、綠青、胡粉塗装を行つた。

#### 金箔 接着剤

黄土等

金含有量90%以上、一〇、九四角

### (二) 材料、丹、光明丹、下塗りには長吉印又は萬印同等品以上の品を用いた。

### 綠青、新岩綠青、上塗及び下塗材

### 胡粉、 膠、 下塗及び上塗胡粉

(一) 塗落し、下地拾え  
下地……在來の塗は素地を損なわぬよう塗落し、清掃の後、生漆又は膠水を塗り、木固めの後、傷は埋木、刻字銅込み地付まで仕上げた。

水を塗り、木固めの後、傷は埋木、刻字銅込み地付まで仕上げた。

### (三) 工法

(1) 播落し、

在来の各塗装を素地を損わぬ様播落して清掃した。

(3) 補修

在来の箇所を煮洗し、磨き形を整えた上金箔押を行つた。

(2) 下地培え

素地の製日、釘穴、割目等には埋木又は刻字を光塗し表面を平滑にした。

(3) 塗装

下塗の上それぞれの下塗を施し、むらのないよう入念に上塗を行つた。

膠の量は下塗、上塗と塗区分に従つて適当な混入量とした。

二、天井縫補修

合天井縫は各間共位置、方向を記入の上取外し、下張より表具やりかえ、絵の破れた箇所はクサビかい欠失部は叶う限り補筆を行なつた。

(+) 材料、鉄  
七、金具工事

鉄

銅

金箔

漆

鉛

JIS規格品、厚さ在来使用しているものに倣つた。

金含有量90%以上、100cm角

国産漆又はそれに準じたものを使用した。

(+) 工法

① 取外し、

取外しに際しては番付を付し、鋼鉄の損失しないよう取外し、特に漆塗

彩色の箇所は丁寧に取り外し整理した。

(2) 新規製作

補足した金具は従来のものに倣い図面又は拓本により作製金箔押を行つた。

八、雜工事

(+) 建具補修

舞良の破損部は在来と同材で補修した。明障子は紙貼りを行つた。

(+) 番工事

内部蓋は全て新規に補足した。床はJISA5901、特級28kg以上、表は備後産17kg以上、紋様付とし骨割りよく作製し、不陸ないよう敷込んだ。

(+) 窓子塗装補修

厨子は漆塗面を清掃し生漆を用いて二回漆拭を施した。金具は在来のまま表面の汚損を洗い上げた。

(+) 周囲雨落石据

巾12cm×厚12cm硬質加工石をコンクリート地盤にて建物周囲に据付け犬走りに玉砂利を敷込んだ。

(+) 雨落石外排水溝

建物周辺の水はけが悪いため、コンクリートU形排水溝を設けた。据付は砂据え、縫目はモルタルとして、水流れよく並べ内部は砂利を敷込んだ。排水溝の末端より排水管を同様に埋設し基壇外へ雨水の排水を行つた。

(+) 基壇橋出入口鉄橋屏

正面及び側面の出入口には高90cmの橋屏を設け両開き黒ペイント塗装前付きました。

(+) 路片付清掃

諸工事完了後工事区域内の仮設物を撤去し、内外の整地、清掃を行つた。

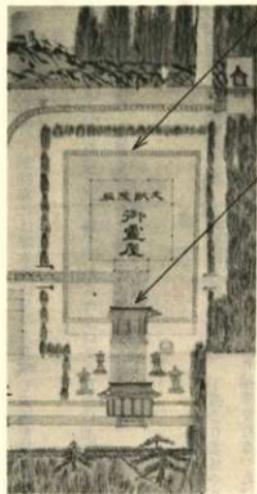
## 第二章 調査事項

### 第一節 修理前の破損状況

明治初期に書かれた古図によると、靈屋基壇正面に唐門、其の両脇と二面が透堀

で覆われ、靈廟の保護形体を調べていたが、明治末に至り、廃却・破損のため倒壊し、現在は石垣に改造、唐門前両脇の石燈籠一基が向拝両脇に移動配置されていた。

今回の維持修理では予算関係にてこれが復旧は不可能であったが、燈籠は旧位置に復しつゝも、市と県の好意により適当な時期に靈廟の保存維持のためににもこれが復旧されることを望むものである。この倒壊した古材の一部は龍華院で寺院境内に保管してある。



明治初年に書かれた古図

み二回下り縁板が落ち込んでいた尚且石が逸散周囲の盛土により縁束一千本の根元が全箇所腐朽し根絶されていた。

軸部、全体にしつかりしており、傾斜もなく小屋も堅固であったが、向拝のみ傾斜を生じて是正と補強が必要とされていた。床下大引一本が蟻害により取替を要す状態であったが、両端が往々打抜ぬであり解体工事ではなく、取替不可能により添木で補強し途中東立とすることを要していた。

縁通り、縁束全部が下部で根絶されており、この根絶部材が乾燥のため当初材より木柄を少々くしていた。縁板も向拝下部のもの一部再用出来たが、九十分は腐朽し、勾欄も八十%腐朽していた。

縁板、建立時の屋根は柿葺で小間返し打の旧野地が六十分再用されており、現屋根は後世棟瓦葺に改修されたもので瓦の葺足の乱れや破損が各所に生じ、屋根の不陸がみられた。隅樋は一度葺替えられ、椎子鬼と二の鬼が入替えられ、取付瓦が落し下し、一部では雨漏が生じ瓦の補足、葺直しが必要であった。

雜作、壁板は横板相欠きとして柱に嵌込まれており、見付の狂い、外部の風蝕、破損等が相当見られていた。合天井は大梁の垂下により押えられ、中央部で水平より二回下がっていた。

以下、靈廟の破損は次の通りである。

基礎、礎石の沈下及び移動は極めて少なかつたが背面（北側）中央部の基礎の

塗装、外部塗装は全面に本地より剝落を生じ、破損は著しかつた。特に軸部及び

建具の塗りは荒廃していた。

彩色は向拝部及び外廻り斗拱、桁、軒、琵琶板で原形が失なわれる程の剥落箇所

があり全面塗替えを必要としていた。内部は台輪より下方に彩色剥落箇所

が生じていたが既して破損度は軽微であった。

尚塗装の彩色についての復旧調査の細部は次の通りである。

#### 向拝正面彩色

##### (1) 柄 (置上極彩色)

彩色下塗り（丹の具下胡粉が塗られている）胡粉地に型押、丹の具に  
て模様の置上後、金箔を同部分に張り以外の地に朱土色（十字部分）

及び白群を塗り同部分更に型押し群青にて文様を書き上胡粉にて点  
入り。

##### (2) 虹梁 (置上極彩色)

彩色下塗胡粉地に唐草、三つ葉葵、のし模様等の置上（盛り上げ）を  
施し各置上部に金箔張り。唐草部の地は緑青の岩絵の具、葵地は紫、  
のし模様は群青、朱土、朱、白群等の配色。

##### (3) 柱上部 (金欄巻)

彩色下塗胡粉地に型押、置上、金箔を張り上部の剣模様は白群、紫、  
白綠、綠青の各器具で着色。中央部唐草地は白綠、葵文の地素、サヤ  
型地朱色、綠は朱及び群青にて三重雲該

##### (4) 斗拱 (平彩色)

彩色下塗胡粉地に型押、置上、金箔外側、斗拱、肘木共中央に上  
胡粉群青の水玉模様、枠内側は朱、外側は綠青。

##### (5) 手狹 (生彩色)

左右共牡丹彫刻、洗い落し破損箇所補充、木地固め漆下地、金箔下塗

り、金箔張り。花胡粉、朱。葉は綠青にてぼかし彩色

(6) 虹染先象鼻 (生彩色)

(5) 同様工程に目及び口に彩色を施す。

(7) 植木 (平彩色)

地、飛擔樁共先端下端、両側、の三面彩色下塗胡粉上に型押、唐草、  
牡丹の彩色がおこなわれ木口は金箔を押し葵文墨書。

#### 宝殿外部彩色

##### (1) 琵琶板

彩色下塗胡粉地に牡丹、唐草模様の型押、唐草は綠青に花群のくくり  
線描。

##### (2) 通討木

牡丹の花は朱及び白の二種で何れもばかりを入れ墨線くくり。

##### (3) 丸桁

彩色下塗胡粉地に面金箔張り朱で彩色。

##### (4) 木鼻

彩色下塗胡粉地に花菱の形押朱色群青に墨線くくり。

##### (5) 斗拱

向拝斗拱と同様。

##### (6) 植木

堅子は綠青塗。

##### (7) 連子窓

#### 宝殿内部彩色剥落止

浮いた部分を膠にて止めて金箔地に表の模様の置上を補修する。金泥  
緑青の補筆。

(2) 丸柱金欄卷

右同様の剥落止と置上金泥補修、群青、朱下、朱の補筆。

(3) 来迎壁

蓮の葉と花の壁画で周囲が剥落しており右同様剥落止を行い、金箔、  
金泥にて補修、白銀、緑青、白群、群青にて補筆を要する。

金具、金具は金箔押の表面が銷び外部長押、高欄などの多くが欠失していた。

表具、合天井繪は全部が剥落欠失前の状態で表具仕替の時期にあつた。来迎  
壁、壁画も部分剥落のため前記の通り補修を要していた。

## 第二節 後世の修理

大猷院は北条出羽守氏重により三代将軍家光公を奉じ明暦二年靈廟建立に発  
し、当時建立された蓋屋は文化十五年、春日厨子と蓋牌を残して焼失、現存建物  
は文政一年再建に着手文政五年完成したものである。これは今回修理に際し市  
教育課増田徹博士により発見された文政二年新規建替仕様帳と、掛川市稿文政  
五年の頃の文政五年十一月十九日再建遷座の記により明らかにされた。その後  
の修理は明らかでないが明治四十年（一九〇七）に柿葺屋根が平瓦屋根に改変、  
周間縁束の根継等が行なわれている。（御普請掛……棟札、風蝕状態より推定）  
蓋屋は昭和二十九年一月静岡県有形文化財に指定され、今回屋根破損、  
向拝傾斜、椽端腐朽、塗剥落、金具欠失等が生じていているので、昭和五十四年  
十月半解体修理に着手して昭和五十五年九月二十日修理を完了した。



参考にした厨子の扉金具

## 第三節 旧規に関する調査と復旧

現施物の屋根は平瓦葺となつてゐるが、後世補修された野地以外は野地板が  
小間返しに張られ上部には柿葺当初の竹針が裏甲上端と共に打たれており、當  
初は柿葺屋根であったことを明らかにしたが今回は復原せず次回工事に於て復  
原する為の資料を残し置き、現状のままの平瓦葺屋根として修理を実施した。

降り棟については稚兒鬼と二の鬼が各棟共ぎやく取り付きになつていていたため置  
き替えた。棟積みも馬鹿高く棟積みになつていていたため二の棟を數平共四段、稚  
兒棟を数平共三段、クサビ型入り反り増し付に整備した。

外部彩色は剥落度その様に達して、いたがからうじて原形模様が整理されこれ  
によつて旧規へ復した。向拝虹梁頭貫見付彩色の中央上段葵入二箇、斜柱寄  
に○に中入不明四箇あり、この不明模様整理は内部厨子扉の散し金具上部葵、  
下部輪宝模様入りの形式を取り入れ給室を入れ彩色形体を整理した。

#### 第四節 棟札、発見古文書

一、棟札

所有者 増川市、龍華院

(一) 「文政三年庚辰夏四月」の記のあるもの。

尖頭形縦高九七、〇〇cm 厚高 九三、〇〇cm 厚 一、三二cm  
上巾 二〇、〇五cm 下巾 一八、〇〇cm

表  
聖三天中央  
加賀領御賀  
裏  
裏裏裏裏生者  
表  
我等今敬致  
文政二年庚辰夏四月奉行  
松山奉入御定  
御遺御防瓶華常沙門長全  
用入 山内五元衛門金  
藤原通尊

木賃者明野朝元乙未九年故城主木賃出羽守今氏重創立  
後西六十年文化戊寅三月、日暮下失火  
殿宇廢棄、資今城主 田中義清新築三  
始復旧貢貢道坐標此不填大工事至相應  
本如右

聖  
裏  
裏裏裏裏生者  
表  
我等今敬致  
文政二年庚辰夏四月奉行  
松山奉入御定  
御遺御防瓶華常沙門長全  
用入 山内五元衛門金  
藤原通尊

口「文政五年壬午二月十六日……」の記のあるもの。

尖頭形縦高三〇cm 厚高一八、六cm  
上巾 一〇、cm 下巾 八、四cm 厚〇、四cm

表  
奉納  
後方棟札  
竹内梅五郎  
清 安

横向井虹染彩色中、○中の横様が決失していた状態

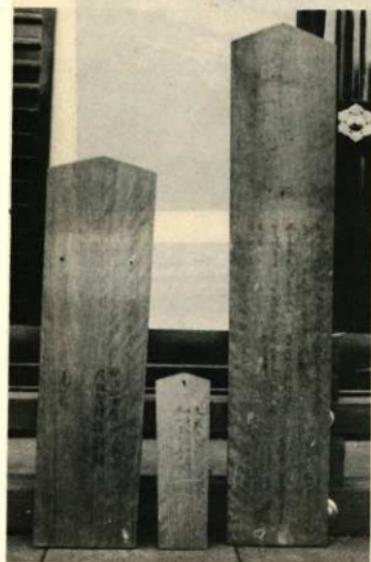
全上○中に輪宝模様を復し彩色を整理した状態



裏  
文政五年  
同七月廿五日 納

表  
奉納  
後方棟札  
竹内梅五郎  
清 安

棟札写真裏面



棟札写真表面



〔御葬請掛……〕（裏面追記明治四十年四月三十日）の記のあるもの。

尖頭縦高六九、四cm 肩 六六、五cm  
上巾 二〇、四cm 下巾一七、六cm 厚 一、八cm

## 表

元方上役	上糸木村
野中八郎 仕手大工 櫻榮	木村藤蔵
服部大五郎	山本万吉 斎門
助定人立合	大浦村
中山作作	服部勝助
善蔵下役	村松文六 左衛門
種虎久兵衛	仕手大工
下又町	大浦村
小奉行	山岡本文六
大澤傳次兵衛	山本林兵衛
	長南

## 二、発見古文書

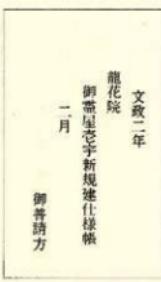
現在掛川市葛川、大工土屋金義さん所有の古文書中より大猷院建設に関する次の古文書が発見され文政二年に再建に着手した建物であることを更に明らかにした。

〔注〕 土屋さんは掛川城のおかかえ大工だった土屋五四郎の分家の子孫で十一代目といわれる。)

## 古文書の写し写真



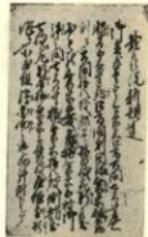
表紙



文政二年  
御葬請方  
御葬請字新規建仕様帳  
一月

本主

龍虎院新規建



御堂屋壹李三間二尺四方大間七尺八寸左右

脇間五尺二寸充四方間割同様垂木繫物

割メ大間拾式支袴軒之出

すもの垂木六支飛様垂木五支御

拝之間七尺八寸輪垂木拾八支側軒之出

七支袴軒合輪垂木拾式支屋根宝形

作ニメ小唐組繪圓面之通向拜附下し

桁巷通虹梁老振差左右象鼻仕付

組物三ツ斗にいたし仰虹梁合蛙股入

御柱挂六寸四分角にノキちようめん付宗

盤大サ柱裏之日ニメ割合常之通御押之出

本柱タハ尺老十五分母側之出本柱タ三尺

三寸六分高欄擬珠中墨負之外

面を押ヘ鐵錠尾根假葉之積り本柱

差渡し八寸丸柱にメ部合拾式本床下之内

八八角ニ面宣候尾引短木四本是は八角

ニメ柱何れも礎三寸四寸丸納入候積り

一本柱高サ石口より臺輪下端迄老尺五寸

床高サ骨面低三尺老十武分

一出もの垂木三寸五分高配飛様高配式寸五分

軒外裏板張

一向拜垂木三寸高配ニメ本側之飛様より輪垂

木いたし附下ヲ同飛様垂木高配式寸

之積り何れも裏板張

一野高配七寸五分ニ致野角を入野無不啻尺

五寸之間ニ打野木廻リ武寸間ニ打候積り

組物三ツ斗ニメ都合拾八組太斗大サ六寸

四分四方ニして割合常之通

柱下端五寸六分勢六寸七分ニ致候之出字

津ニきざみ候積

一角木下端四寸勢イ四寸四分木餘り木負萱

角組手切込木餘り品能いたし宝形四本

柱差候積り

長押之分何れも巾五寸柱外之出老尺上押ヘ

とも都合四通之積り

一寄長押式寸武分巾柱納仕込候積り

一臺輪下柱貫幅六寸老分厚式寸武分鼻

之出さきみ付候積り

一臺輪式寸六分ニ八寸左右鼻之出老尺余ニメ

きざみ付形作候積り

一臺輪下柱貫幅六寸老分厚式寸武分鼻

之出さきみ付候積り

一垂木下端式寸勢イ武寸四分垂木鼻五寸

程之内下反り六分程左右式分五層程形作り

細め候積り

一本負下端四寸勢イ四寸四分軒外反りせい七

分五厘反り積り

一蓋負下端勢イ共ニ右同寸軒外反りせい老

本半之反り積り

一本負下端四寸勢イ四寸四分軒外反

は蓋負ニならひ候積り

一貫印高さ式寸四分幅六寸鼻は式分増ニメ反

は蓋負ニならひ候積り

一力垂木老方ニ三本入蓋覆江蠅懸ニ致

候積り

一京桁力垂木ニ組合持七候積り



一軒付板拾五枚重之脚合ニシテ小屋組高配

引付候積り うめん付候積り候割合

一脚入口唐戸四枚候板式寸四角分ニメ

老松幅外法老戸五寸五分上ト枝外法五尺

九寸九分桂外法より老す宛にメ其外幅長上

納老寸五分下納五分メ候候部合八本入何

も腰を押さるよめん付候積り候割合

枝と枝之間ハ枝裏目致右引残三ツ七分

五厘ニ利戸之明々老ツ半寸中明老ツワ分五

厘下之明老ツニいたし候積り

一腰付板方内五尺八寸間之横

一合天井八枚老戸間組腰を押さらうよめん

をとり組方手際敷板入達ニ張候積り

一板端引十文字ニ差上遣間切ニメ

板敷目達はぎにして合釘打都

一上絶削之積り

一両妻之間之内中七尺八寸間之所まいら戸

式本充達込模等まいら戸都合四本尤

兩面之積り追而差可致事

一金剛連子脚合左右之間折込四ヶ所

數屏鶴屏入連子建子拾本つ人爪實形

之積り同所にまいる武本充都合拾六本

建候なり

一折込四方如何物拝ノノ目達は？致し

合釘打候積り

一拂洋虹深八寸五丈兩側之山出象鼻之積

一すがる破風上とめニ西八分取之積り



一たばさみ岩に牡丹之積り

一御縫側高サ板上端込尺七寸五分板奥之

出下長押外面より板鼻通三尺五寸之積り

一高麗擬珠透木金物下込老戸三寸

八分擬珠老戸八分程之積り

一右同断地覆三寸角其上平行之間三寸三分

平行厚さ老戸五分幅三十其上ほこ木之間六

寸五分ほこ木差渡し毫寸八分之積り

一崩折しめ染式つ通つ十文字二人込術ニ蝶

懸之積り

一小屋組半形請四本柱元ニ而踏張候様

可致候露盤大サ法式尺寸二付右之心得

ニ而可致事

一縁下折廻四方角子ニメ老方ハ取置候様

可致事

一本方柱之分構組物形物之類補之物可也

圓垂木は松之積り

一御押之柱御縫側は規に候

一本方柱之分構組物形物之類補之物可也

新土入替突堅メ置候得は今度

御蓋屋之分構地形三間半四分之内七寸程

新土入替突堅メ御縫側通八五寸程も持込堅め

石突穴共矢倉胸突ニ致堅め役人

差因之通可致事

一御材木之分何も其場所渡代竹繩釘

等之儀ハ御作事ニ而相渡候事

一大工方木棧建方體手傳地形人足共請

申者主事より御承知候事  
致候候事相手方ハ役所ニ而致候ニ付請  
負方ニ而積ニ不及候右之心得ニ而積立可致  
候事主事より右事相手

負方より差出屋根下地野木運打候事可  
致候候事相手方ハ役所ニ而致候ニ付請  
負方ニ而積ニ不及候右之心得ニ而積立可致  
候右之通

御墨屋毛字新規連繩圖之通得と相

改積立入札可致候尤御大切之御普請之  
儀ニ付無此上念を人仕立可申候取扱り之儀  
は五月中旬より取扱り毎月迄に告出来之積  
り金渡之儀は初金武分口相渡中金之儀は普  
請出来方次第追々相渡殘金武分口は御普  
請告出来見分相済候上相渡可申候依之  
諸成請人を立入札書付右名前ニ印形致  
可差出候場所柄之儀ニ付火の元等ハ不  
申及大工万人足方不難無之様可致事

卯二月

御普請方



1 塔工全影（南西面）



2 塼工向拝詳細



3 塼工 宝殿軒兒上詳細



4 塚工正面（南側）



5 修理前正面（南側）



6 琉工側面（西側）



7 修理前側面（西側）



8 竣工背面（北側）



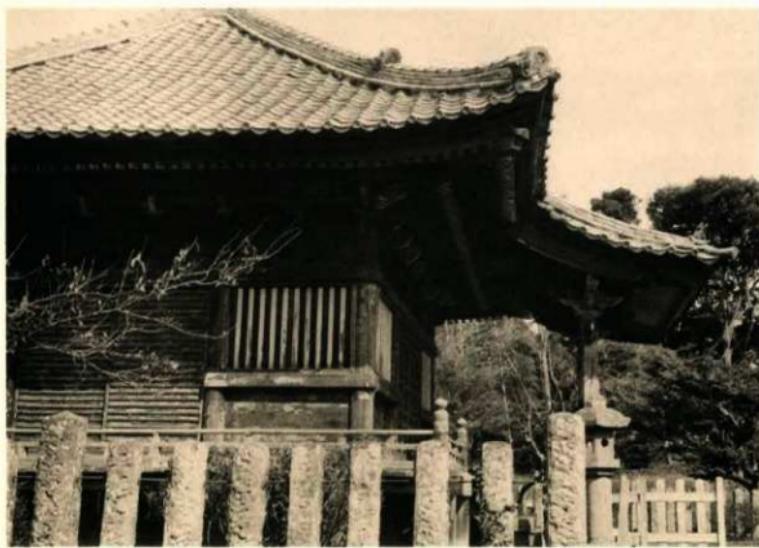
9 修理前背面（北側）



10 竣工  
南西面軒見上げ



11 修理前  
南西面軒見上げ



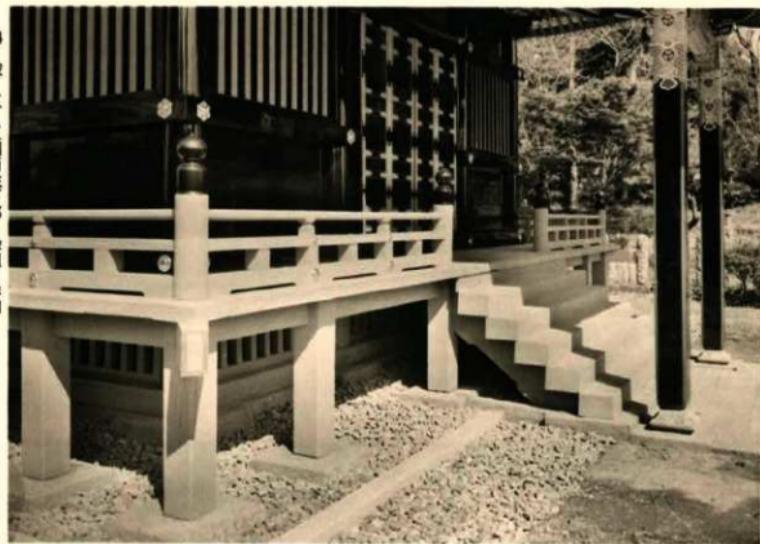
12 嫗工  
向拝柱上部、虹梁、斗拱、丸栱の彩色



13 修理前  
向拝柱上部斗拱、丸栱の彩色破損状態（外部より見る）



14 塗工 正側面柱下部と縁廻り詳細



15 修理前 正側面柱下部塗剥落と縁廻り破損状態



16

塙  
工  
背面外部詳細

17

修理前  
背面外部の破損状態

18 塗工 週縁、高欄詳細



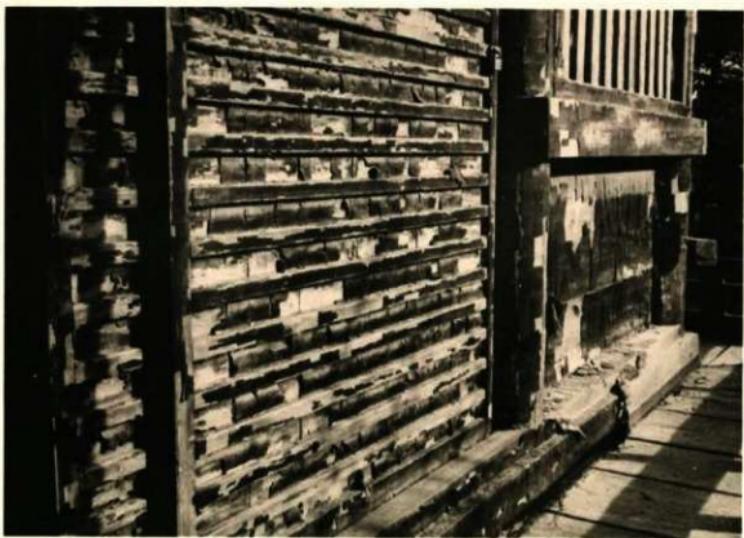
19 修理前 週縁、高欄の破損状態



20  
竣工  
外部側面舞良戸、長押取付状態



21  
修理前  
外部舞良戸、長押破損状態



22 埼工 宝殿へ向拝の取付部詳細



23 埼工 宝殿軒隅見上詳細



24 墓工外部軒見上詳細



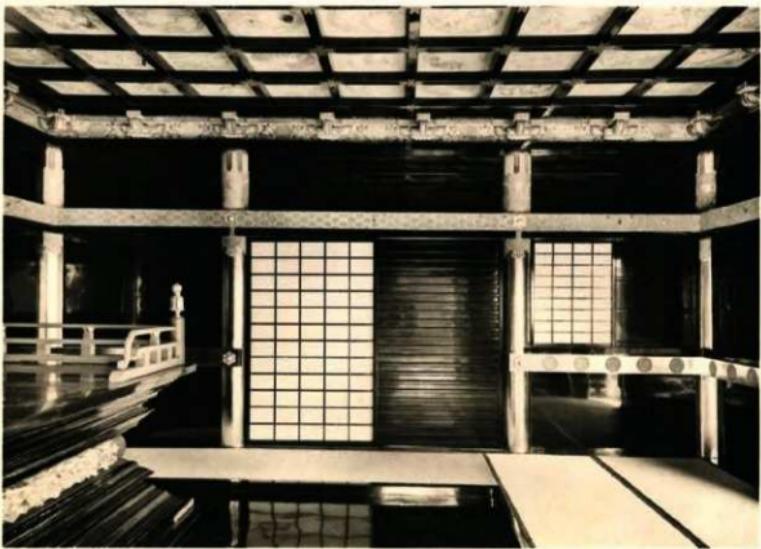
25 墓工内部西北面



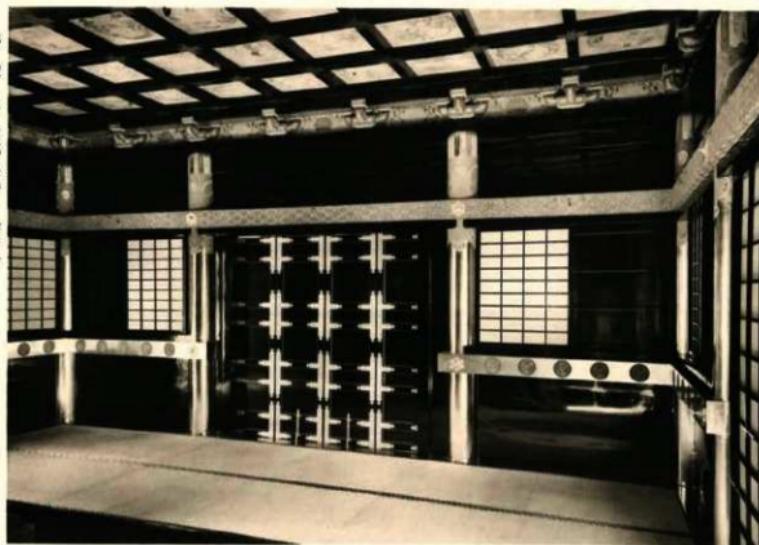
26 竣工 内部正面（北面）



27 竣工 内部侧面（東面）



28 埼工 内部見返し（南面）

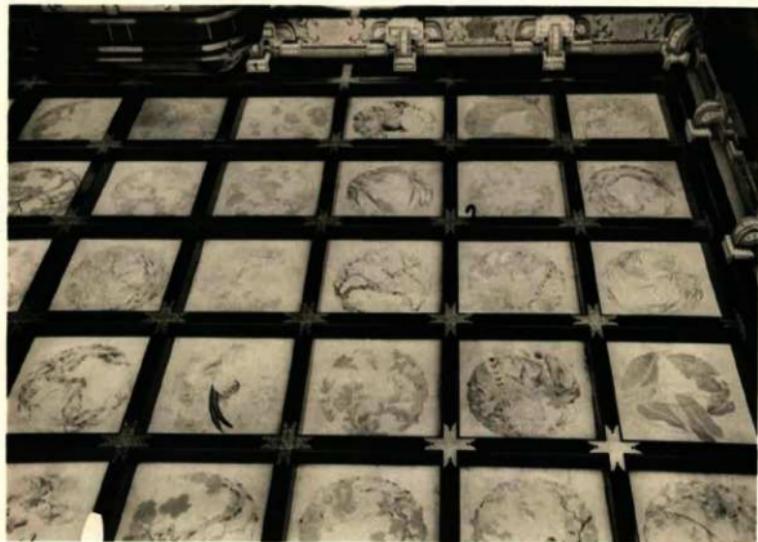


29 埼工 内部合天井



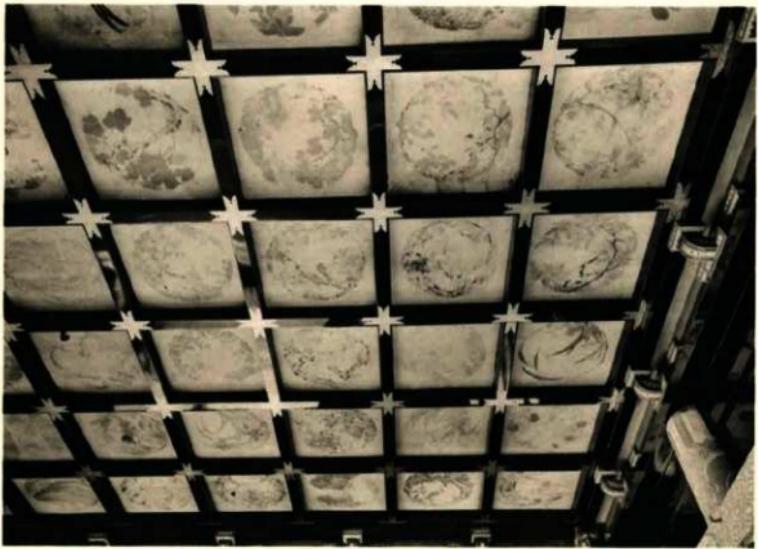
3 1  
4 2

1 位置（東北隅見上）



3 1  
4 2

2 位置（東南隅見上）



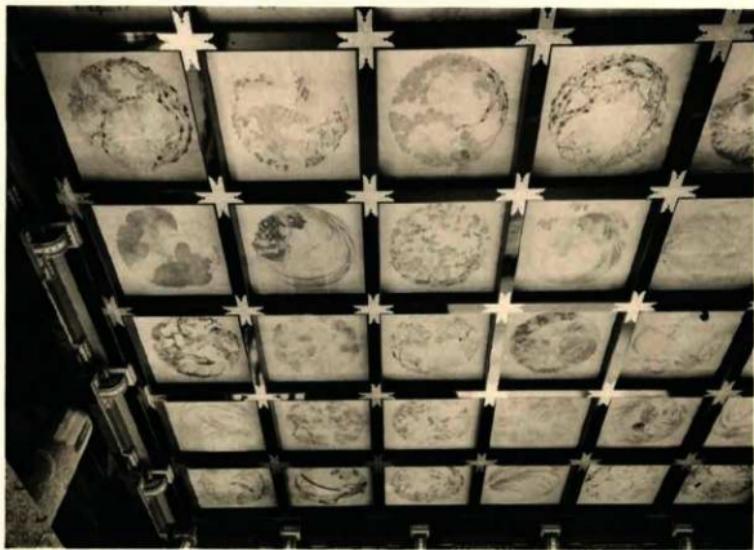
3	1
4	2

3 位置（西北隅見上）

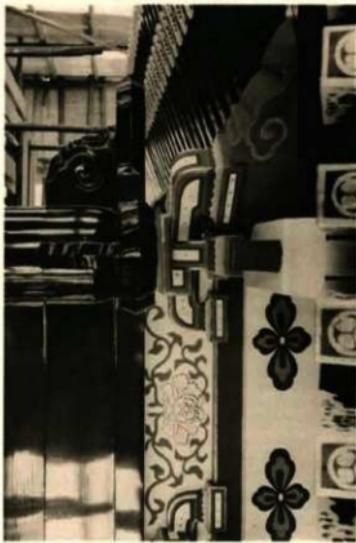


3	1
4	2

4 位置（南西隅見上）



34 塗 塗工 宝殿平子株御群御



36 塗 塗工 宝殿十子株御群御



37 塗 塗工 向拝、タバサニ



35 塗 塗工 宝殿平子株御群御



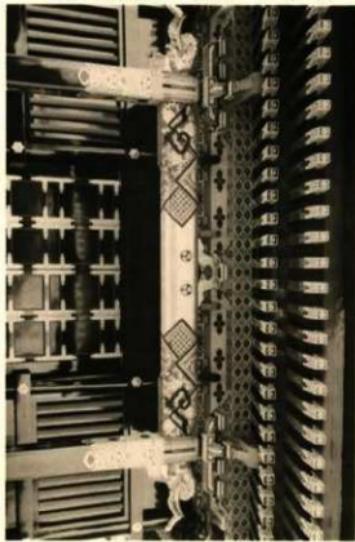
38

坂工内部、柱、斗拱、長押の様子



39

坂工同様柱と近來形頭貫の様子



40

坂工内部、柱、斗拱、長押の様子



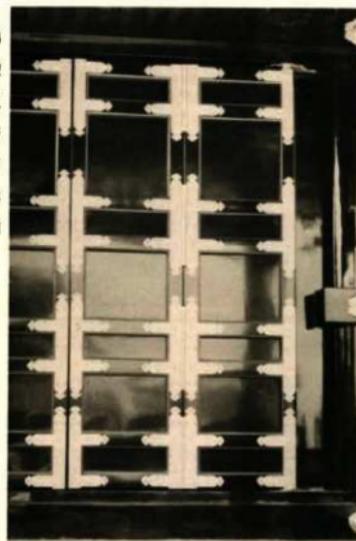
41

坂工向拝見返し





44 塗工唐戸 詳細



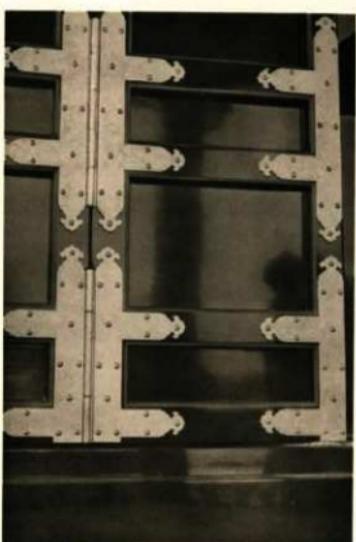
45 塗工舞良戸 詳細



46 資料 房子金具 詳細



47 資料 唐戸金具 詳細



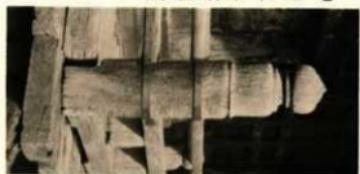
48 資料 宝殿の高欄と子供



53 資料 内部腰高欄(後)



49 資料 宝殿高欄(柱)



51 資料 軒丸瓦



50 資料 降棟瓦、唐草瓦



52 資料 宝殿の高欄と子供

54 相立小屋組、野地の状態



57 破損状態、天井絵障壁



55 相立屋根平瓦葺の状態



56 破損状態、内部天井絵



58

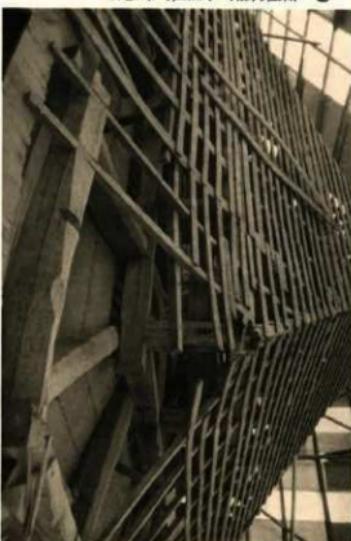
(開拓は稚子見どこの奥が入れ替えられている)

破損状態、平野



59

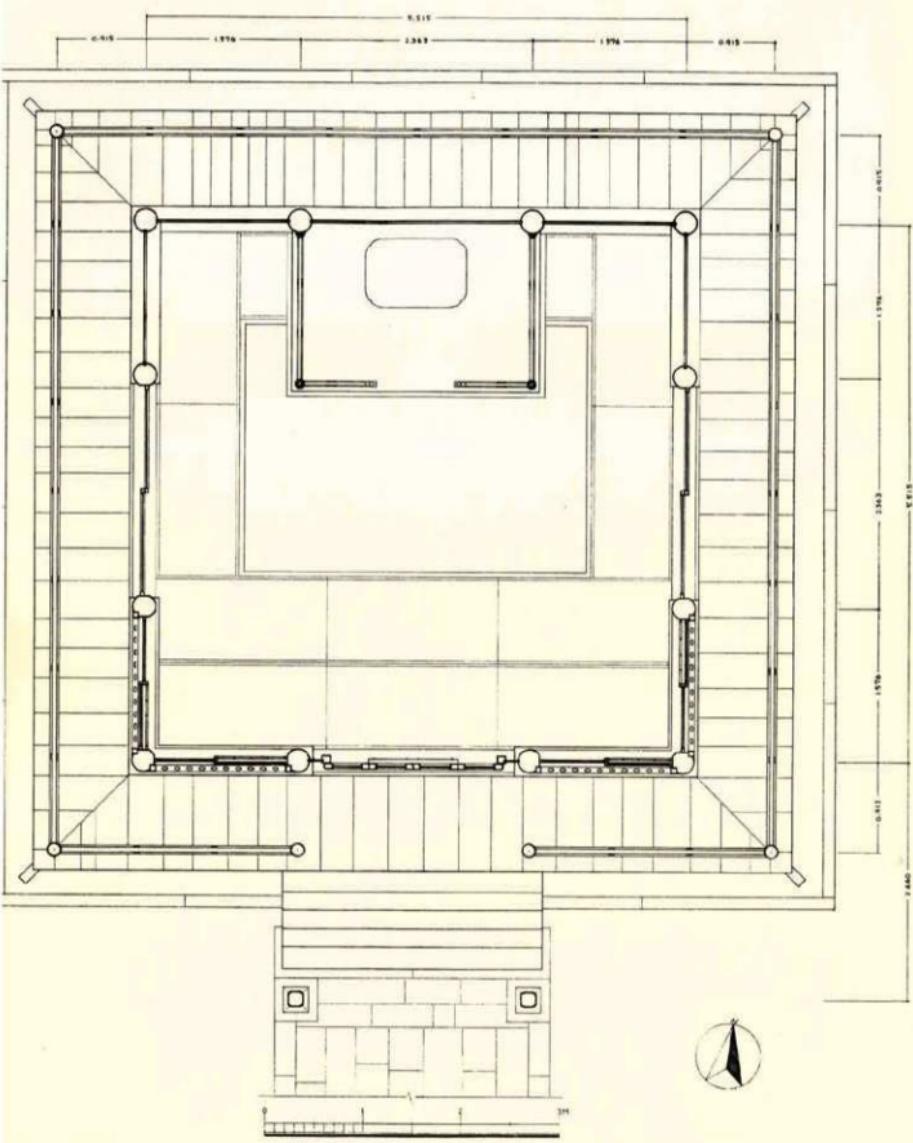
破損状態、小屋組、野陽木



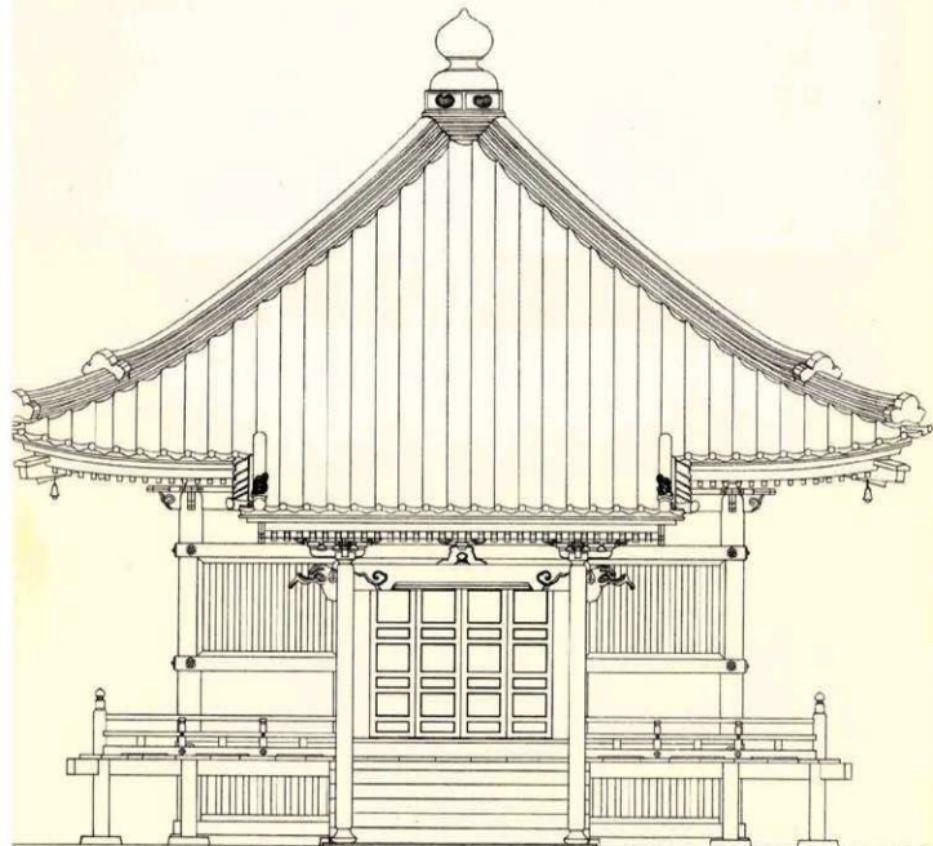
60 破損状態、平野

地



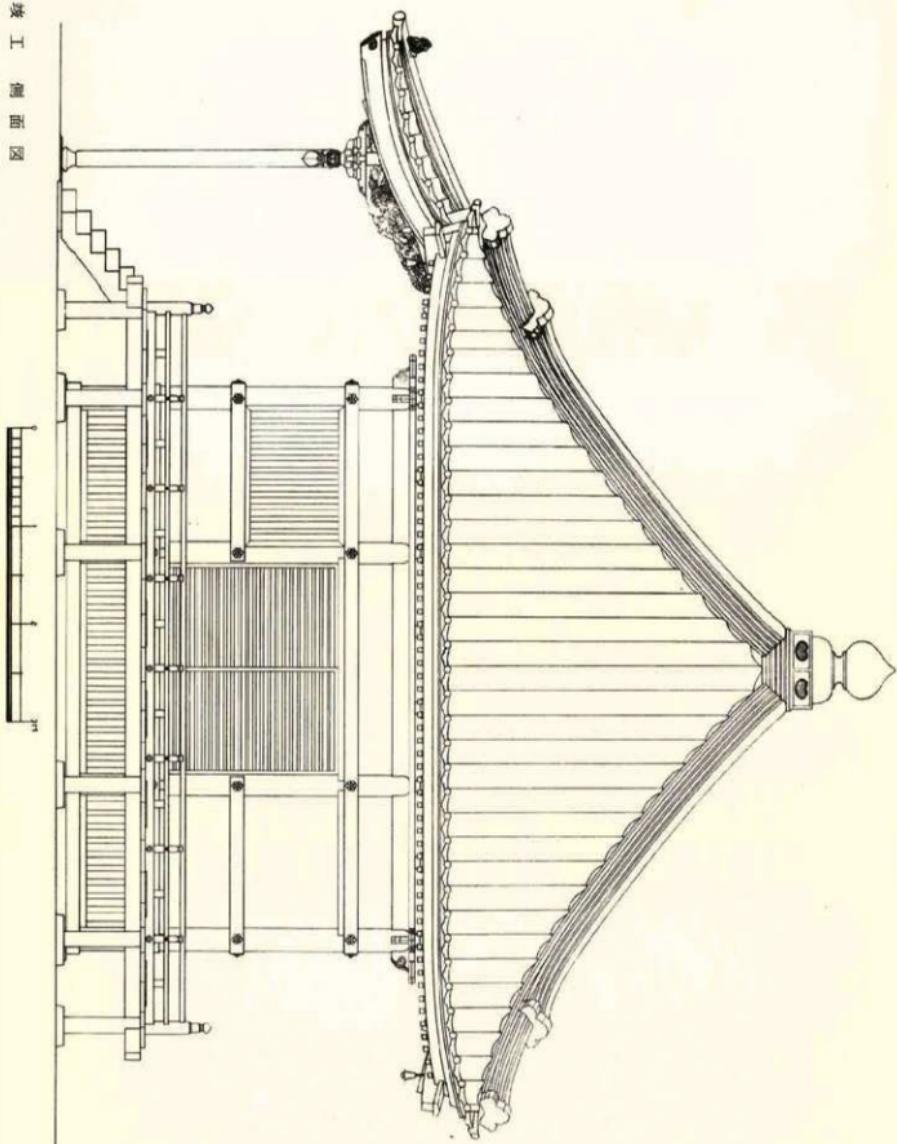


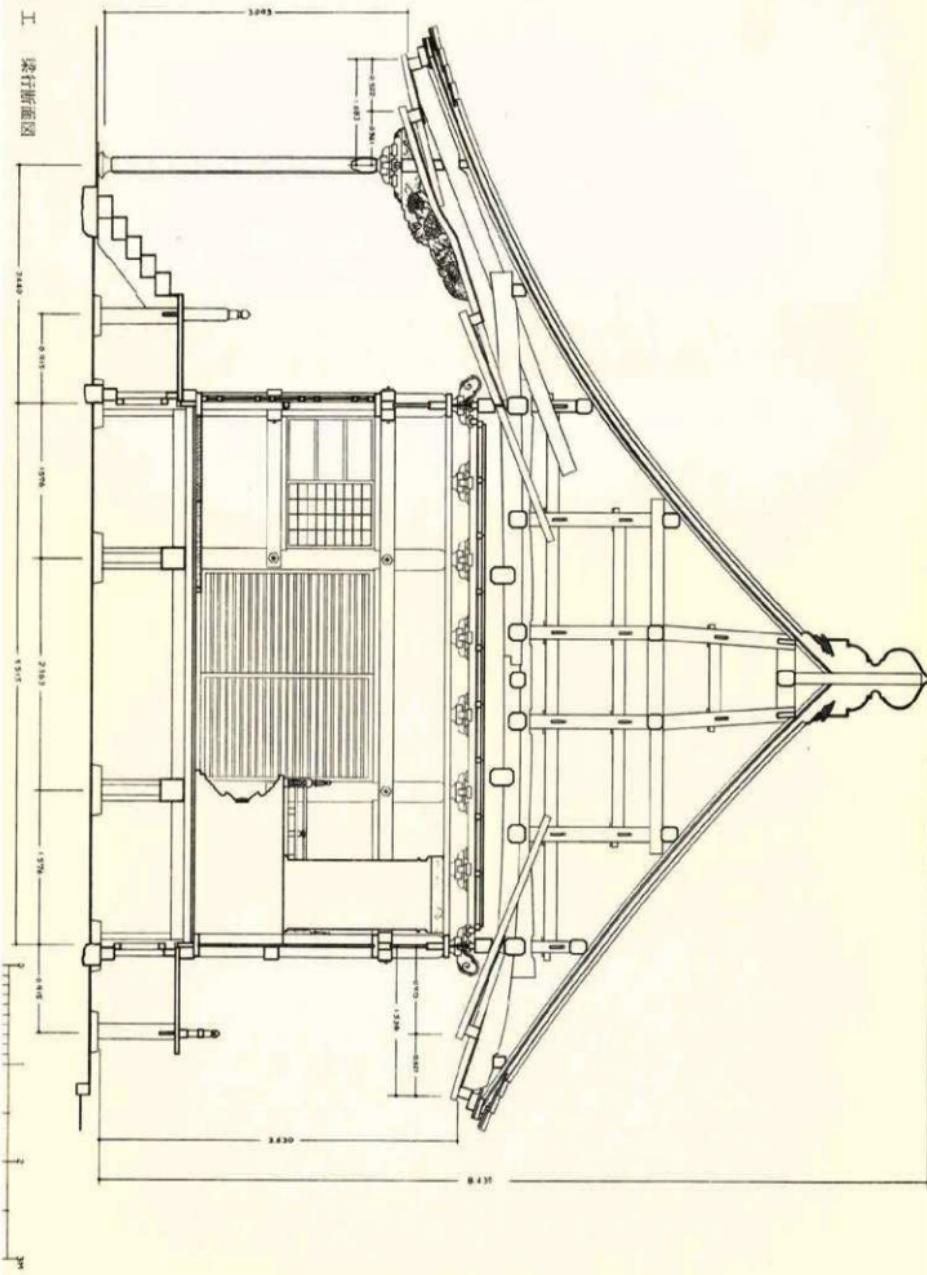
1 総工平面図

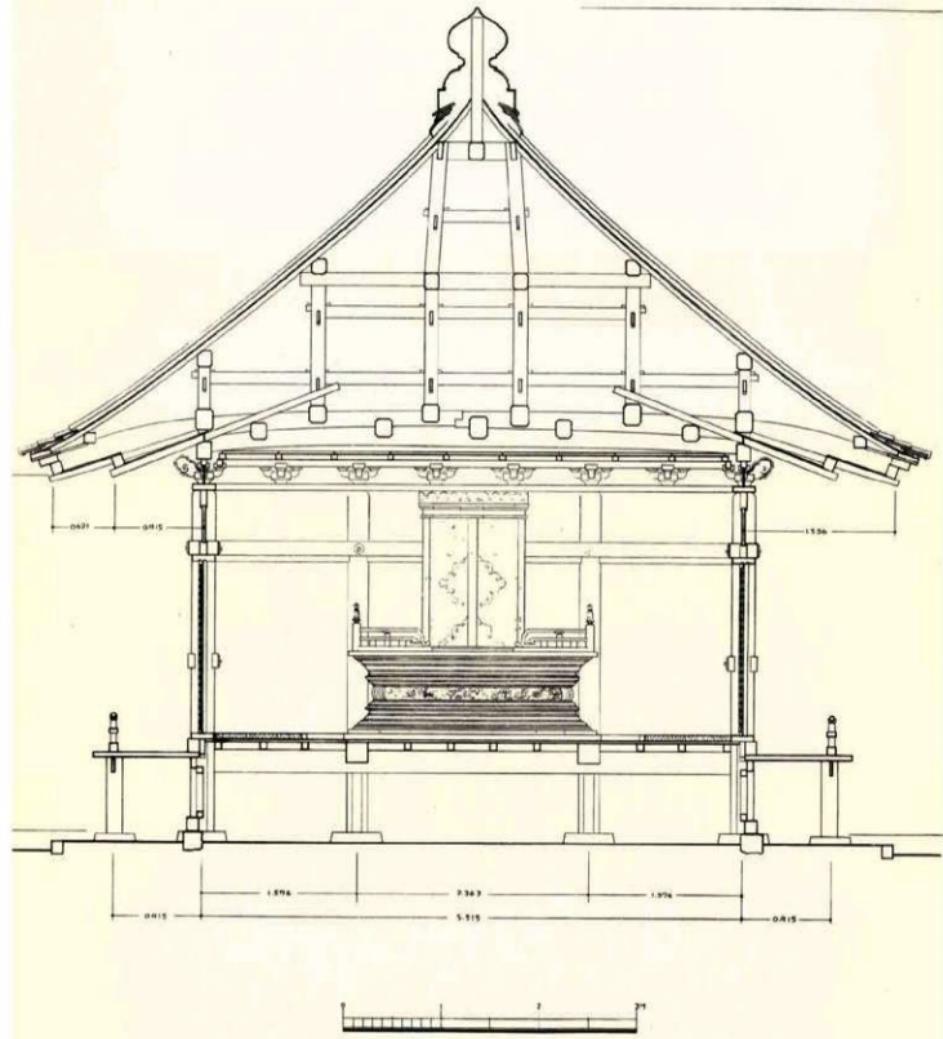


2 塚工 正面図

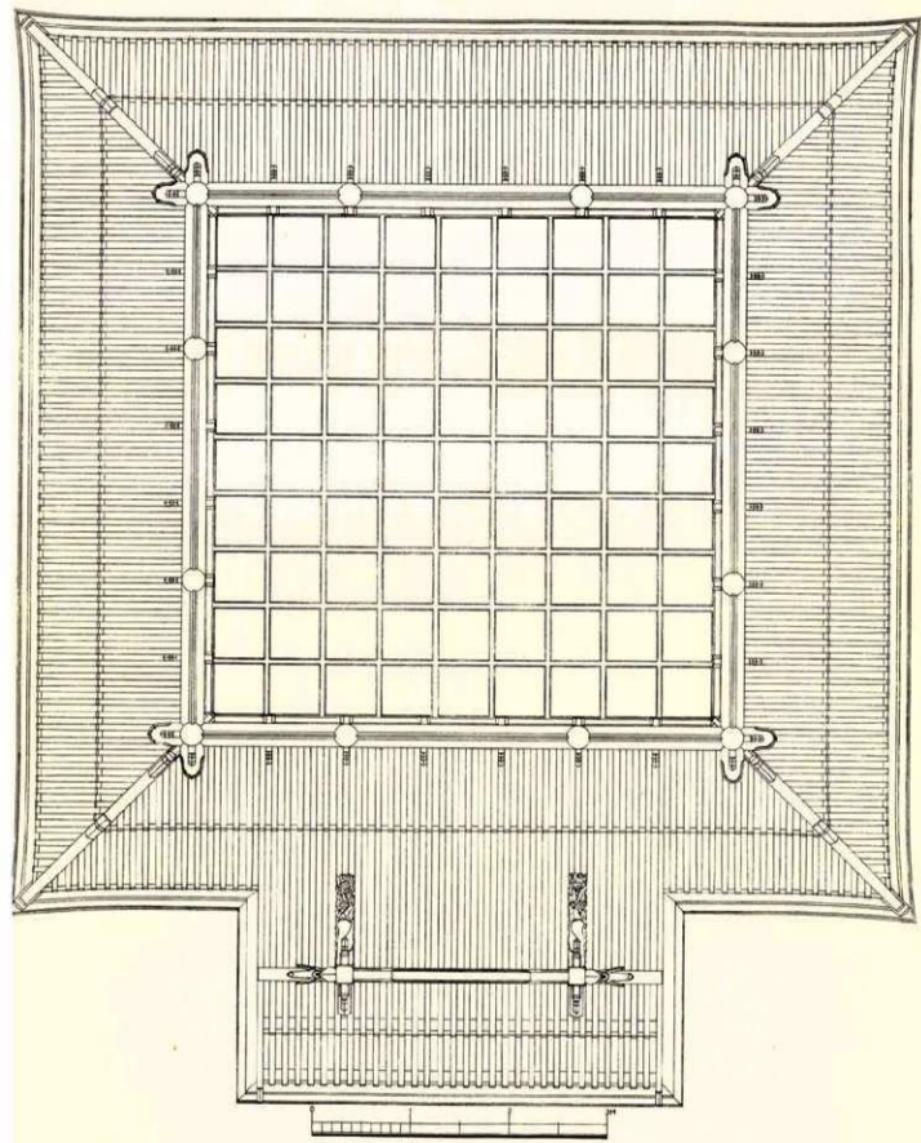
3 埃工 橫面圖





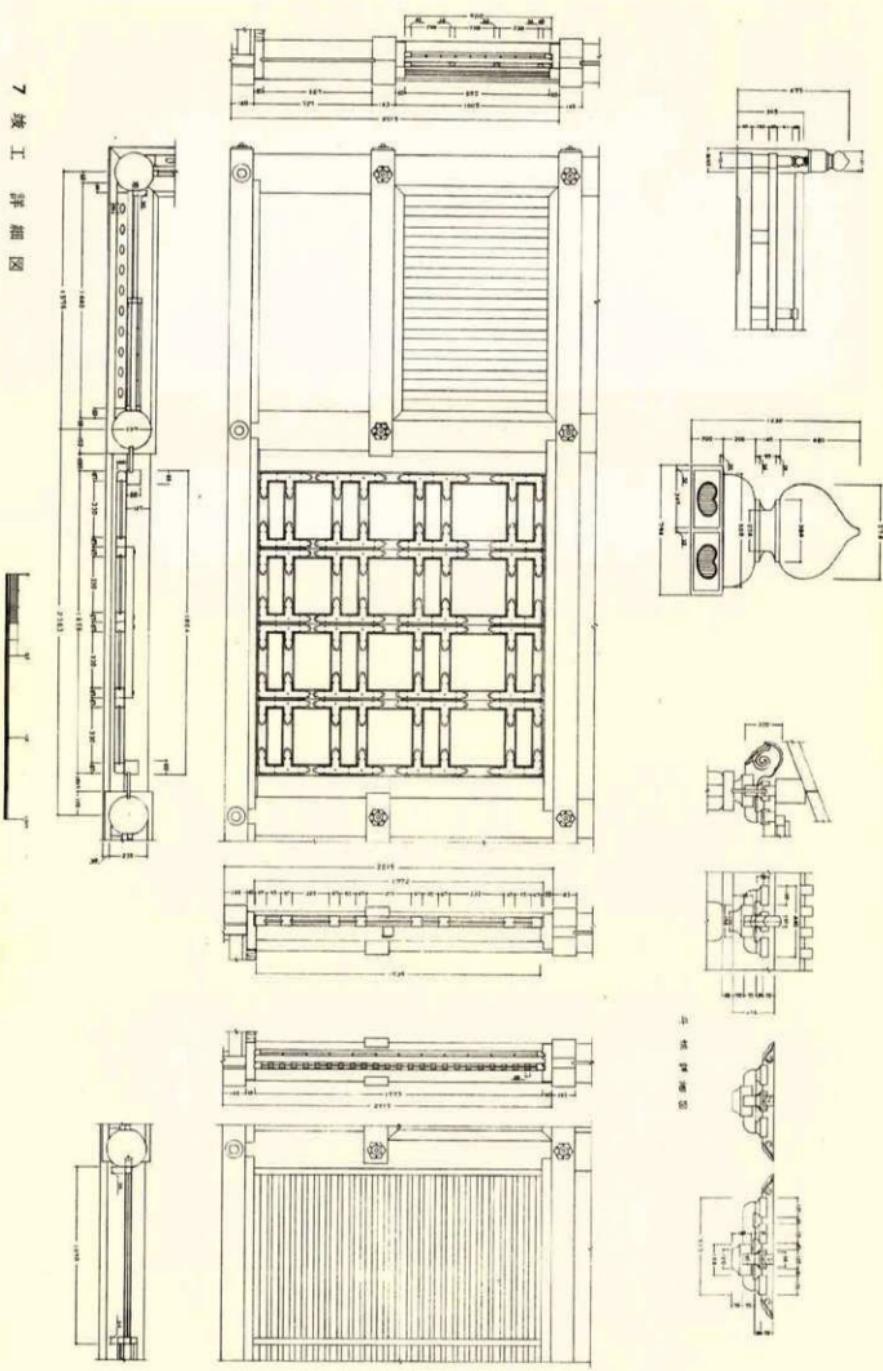


5 竣工 桥亭断面图



6 緯工見上図





昭和五十五年九月

静岡県指定  
（建造物）龍華院大歎院靈屋修理工事報告書  
有形文化財

編集人 財團法人 文化財建造物保存技術協会  
発行人 静岡県掛川市掛川 龍華院  
印刷人 京都市下京区油小路弘光寺上ル  
製本人 有限公司  
電話京都（〇七二）三五一一六〇三四  
真陽社

